『南山神学』43 号（2020 年 3 月）pp. 125-151.

教育とミッション

ジョヴァンニ・リヴァによるキリスト教的教育

アンジェリーナ・ヴォルペ

はじめに

ジョヴァンニ・リヴァは「生まれながらの教育者」であり，特別な才能を持っていた。それは，若者が神の子どもとしての自尊心を持って生きるための教育をするという才能である。これは神からいただいた賜物と言えよう。彼は出会う人誰に対しても常に真実の言葉を語った。その言葉は決してイデオロギーから生まれたものではない。キリストへの従順において逃げ道のない生きた献身から生まれた言葉だからこそ深く，自由で，説得力があったと思う。

ジョヴァンニ・リヴァが出会った数えきれない若者のうちの何人かは，この友情によって，次第にイエスが彼らの文化，愛，活動の中心となった。

本論文は，彼の教育思想を分析することにより，50 年にわたって発展した彼の教育活動を総合的に呈する。特に，キリスト者としての生き方を若者に教える意味を分析したい[1]。

---

[1] この論文のために，主にジョヴァンニ・リヴァの講義録，ミーティング，聴講者の手による記録を使用した。それらはカトリック信徒団体オペラ・ディ・ナザレと，同団体から派生した平和活動の組織のものである。先にジョヴァンニ・リヴァに関する 2 つの論文を発表した。A. ヴォルペ「キリストと兄弟を愛することを教えてくれた友人 - ジョヴァンニ・リヴァ（1942～2012 年）」『宣教学ジャーナル』第 9 号，2015 年，45-67 頁 ; Ead.「オペラ・ディ・ナザレ - 十字架につけられたアガペ」『南山神学』第 39 号，2016 年，19-46 頁参照。

1.　始まり：1960 年代と 1970 年代の「One Way」学生運動

60 年代（おそらく 1964 年）に，ミラノの若い教員ジョヴァンニ・リヴァ[2]は，レッジョ・エミリアの教区学生センター「サン・ジョルジョ」から若者対象の講演会を依頼された。インタビューで彼はこのように語る。

> 私は招きに応えて講義をし，議論しました。そこは学生だけではなく若い社会人も参加していました。しかしこれは一時的な出会いに終わらず，そこから友情が始まり，彼らから文化や時事問題の様々な話題について勉強会を開いてほしいと依頼されました[3]。

その後，友人になった参加者によると，テーマは「勉強する理由」，そして「学生と教員との関係」に関するものであったようだ。残念ながらその講義録は逸しているが，ジョヴァンニは常に時間の経過や環境，文化や国によって左右されることのない「普遍的」な基本概念を教えた。おそらくその時も勉強とは競い合うことではない。知識は自分の利益のためではなく，また人々を虐げるためではない。勉強は奉仕のためであるという内容であったことは容易に想像できる。実際，ビリヤードや卓球，ギターを楽しむためにセンターに来ていた何人かの少年は次第に彼に魅了され，会い続けた。ジョヴァンニは熟練した話し手であり，証し人[4]として，人生には終わりのない意味があるという仮説を自信を持って若者に投げかけたからだ[5]。イエスを美しい理想主義ではなく，人生のすべての状況において確認できる仮説として提示したことが，若者には衝撃的

---

2 これより彼をジョヴァンニと呼ぶ。

3 *Sul Sessantotto, One Way, Reggio Emilia e dintorni. Un'intervista con Giovanni Riva*, a cura di A. NESTI, "Religioni e Società", n. 62, anno XXIII, sett.-dic. 2008, 88. (以下: *Intervista*).

4 「証し人とは，自分の内にある真実を実行する人です」と 22 歳で書いた。[G. RIVA], *Nella nostra vita l'azione*, Milano 1964, VII, pro manuscripto.

5 Cf. G. STACCIA, *Il nostro amico Giovanni, in rapporto con l'infinito e con gli uomini*, Tonalestate 2012, Ponte di Legno, 5 agosto 2012, 講演より。

であった。彼にとってイエスは本物の人間でありながら，人類と神が一致した現実的なしるしであった。

当時，若者が混乱し落胆する時代であった[6]。彼らを取り巻く日常，学校は「批評する力」，つまり若者が現実を判断し改善するための「一貫した基準」を与えなかった[7]。

ジョヴァンニは少年らに「定言と反定言」の単純な比較を教えることはせず，学校環境の改革を進めた。そして具体的かつ理想的な活動を始めるための会議を 1966 年 12 月に開いた。彼の提案は，キリスト教の伝統を確認することから始めるものであった。

> 構築するためのアイデアが必要です。そうでなければ瓦礫を積み上げるだけです。正しいアイデアがない限り，何も構築できません。イニシアティブを取ることは，ある価値を確認し，そのために行動することです。［……］若い人はこの育成を自分で行うことはできませんし，学校から助けられることもありません。したがって，このギャップを埋めるために，一般の学校とは異なる環境が必要だと考えました。それは，まさに学生生活のリズムに従って，キリスト教の伝統を確認させる場所です[8]。

---

6 スターリンの死後，朝鮮戦争の終わりに，世界の指導者は対立ではなく対話を求めていたように見えた。教会では第 2 バチカン公会議と，全世界に平和と正義のメッセージを送り出した偉大な回勅「地上の平和 *Pacem in terris*」の 2 つの奇跡が起こった。ハマーショルド，ケネディ，フルシチョフ，ラ・ピーラの時代であった。しかし 1963 年，教皇ヨハネ 23 世が亡くなる。同年 11 月にケネディが暗殺された（ハマーショルドも 1961 年に死亡。おそらく殺害された）。フルシチョフが 1964 年に追放され，同年，南北ベトナム間の状況が悪化した。

7 Cf. [G. RIVA]*Riflessioni da un convegno*, 29-30 dicembre, Roteglia (R.E.) 1966, 2, pro manuscripto.

8 *Ibidem*.

ジョヴァンニの周りに集う若者は，学校生活，社会や世界情勢の問題について話し合うために，頻繁に，そして定期的に集まり始めた。彼らは，歴史，哲学，国語などの一般科目を文化的に見直し，植民地主義，ダンテ，聖アウグスティヌスなど様々な分野の話題を取り上げ，学校制度が課す枠組みを超えて，「客観的価値をどれくらい回復できるのか」[9]試みた。

同時に，高校で委員会や集会活動のグループを立ち上げ，チラシを配りミーティングやディスカッションを行った。他グループとの対立を避けられないこともあったが，時には左翼グループと共に活動したこともある。「カトリック教徒であろうとマルクス主義者であろうと，忠誠心を持って意識的に行動する人は証し人だ。自分の理念と存在の証しである」[10]からだ。当時，カトリックは反共産主義と言われた時代であった。カトリック教徒の親にとって，子どもたちがストライキに参加し，マルクス主義者らと一緒にデモをする姿はスキャンダルそのものであった。

一方，“One Way”（ジョヴァンニと若い友人は 1968 年 5 月にこの呼称を使うことにした）[11]の人々は，キリスト者としてのアイデンティティについて妥協を許さなかった。彼らは，異なる概念によって行動する人とも対話をし，同じ行いによって協力することを受け入れていた[12]が，あいまいな態度を取ることは一度もなかった。彼らの談義と活動は，社会学的な課題や政党政治の論理によるものではなく，常に人間の要求に確かに応えるイエス・キリストへの信仰に基づいた「人類と宇宙に対する慈しみ深い方としてのイエスを再び体験する提案」[13]であった。彼らは「神を愛するなら，自分の楽な生活の中に安らぐことはできません。革命が必要です。それはキリスト教的な愛によってもたらさ

---

9 E. GEMMA, *Oltre la contestazione,* Jaca Book, Milano 1969, 22.
10 [RIVA], *Nella nostra vita l'azione,* VII.
11「One Way」は，高校生，大学生，若い教師と若い労働者が参加した。
12 Cf. [RIVA], *Nella nostra vita l'azione,* VI-VII.
13 *Intervista*, 95.

れた普遍的な革命です」と繰り返していた。世界の貧しい人々との連帯デモを行った時, 彼らはこのメッセージを横断幕に記す勇気を持っていた。もちろん, これはマルクス主義者に拒絶されたこともあったが，まもなく“One Way”は少々「厄介」なグループになっていく。いつも誠実であり，真剣で精魂込めて協力するあの若いクリスチャンは，マルクス主義者にとっても魅力的な存在であるからだ[14]。

一方，第 2 バチカン公会議が提起した希望にもかかわらず，1960 年代のイタリア教会は社会に対して閉鎖的であった。学生の世界を扇動し始めた新しい運動を無視した教会は，一般的な祈りの集会と儀式，若者を集めるためのサッカーやパーティー活動など，または連帯の本来の意味を殆ど学ぶことなく一時的なボランティアを行っていた。したがって, 若者を現実に巻き込む“One Way”の情熱はあまりにも過激であり，正統的ではないと見なされ，非難されたことがあった。

“One Way”は確かに先駆者であり「潮流に逆らう人々」であった。キリスト教を「慣習やご都合主義」的宗教ではなく,「人間の欠落を癒そうとしたイエス」[15]の具体的な追従において「貧しい人々の分かち合い，踏みにじられた人間の尊厳への慈しみ，そしてより誠実な正義のためのあらゆる可能な変化への責任であった」[16]。パウロ 6 世が 「諸民族の進歩 *Populorum Progressio*」に書いたように，教会をおびやかす「苦悩の叫び」[17]に対して，彼らは具体的に応えようとした。当時，イタリアで最初にビアフラ問題を市民に周知させ，苦しんでいる民族のためのデモを組織した。また，フランコ独裁政権について講ずる知識人を招聘しようとスペインに赴くこともあった（ジョヴァンニは，アルフォン

---

14 Cf. G. RUGGIERI, *One way: un'esperienza di chiesa a Reggio Emilia,* “Prassi”, 1, febb. 1972, 71.

15 *Intervista*, 96

16 *Ibidem*, 106.

17「諸民族の進歩」，3 参照。

ソ・コミンのような反フランコの知識人やホセ・マリア・ゴンザレス・ルイスのような神学者と交流があった)。また貧困と独裁政治によるラテンアメリカの深刻な状況，東方教会の苦しみにも関心があった[18]。同時に，バインシッザ地区（レッジョ・エミリア市）の疎外された子どもたちへの忠実で系統的な教育支援を始めるなど[19]，地元に対しても意識をそらさなかった。

彼らは自分の街，国，世界の出来事に日々注意を払い，その現実の意味を考え，問いかけ，自分自身で判断し公言することを試みた。彼らを特徴づけたのは，それがいつも福音の求心軸からスタートしたことである。それは「他者を教育し，自らも教育された」という恒久的な状態と言える。

60 年代，この教育的な仕事をより効果的にするために，彼らはなけなしのお金をはたいて“Nuova Terra”（新しい大地）という書店を開いた。文化活動を行うこのまじめな書店は「解放のための情報」というスローガンをたて，当時の文化的政治的な書籍と雑誌をほぼすべて提供していた。ジョヴァンニは「書店は真の文化の中心地になった」とインタビューに答えている。ジャン・カードンネル，マックス・デレスペッセ，ジュリオ・ジラルディ，エンツォ・ビアンキなどの政治的，神学的分野の重要な人格がこの書店を行き交った[20]。

そこは若い共産主義者らも顔を合わせた。“Nuova Terra”は福音書や教会文書だけではなく，『資本論』を読み，歴史，政治，経済について語る人々が集う場であった。エミリア・ロマーニャ州の何人かの若者は後にテログループ“Brigate Rosse”（赤い旅団）に参加するようになるが，ジョヴァンニが指導するグループからは誰ひとりとしてテログループには近づくことはなかった。

---

18 Cf. STACCIA, Tonalestate 2012.

19 1 日中工場で働く労働者の子どもの多くは，学校が終わると独りぼっちだった。学校に行かない子ども，成績が悪くて学校をやめてしまう子どももいた。

20 Cf. *Intervista,* 116.

彼らは大きな教育的配慮に守られ，暴力で世界を改革する手段を徹底的に拒んだ[21]。

彼らの武器は言論であり，世の中を改革する方法は世界中にコンパニアの場所を構築することであった[22]。

1.1 “Nuova Scuola”（新しい学校）の冒険

この最初の若者は，後に個人的な召命の選択に直面することになる（ある人たちは結婚を通してキリストに献身する道を選んだ。またある人たちは自分の家族を持たずに，社会において壁のない修道院の生き方を選んだ）。

ジョヴァンニは 1968 年にヴァリー・グレゴーリと結婚し，5 人の子どもを持った。その新しい状況は学校の大切さを気づかせてくれた。そこで，子どもを持つ仲間[23]と共に，保育園から高校までの“Nuova Scuola”（新しい学校）を作ることとなった。それは自分たちの子どものためだけではない。すべての子どもへの愛情と，そしていつか彼らが「知性と自由によって自分の地上の経験」をし，成熟した人間として生きてほしい，という願いから生まれた[24]。

---

21 Cf. *Ibidem*, 100; 114-116. ジョヴァンニの数多い功労の 1 つは，何人かの若者に暴力に訴えないよう説得したことである。「赤い旅団」は，1960 年代にはまだ過激派でなかった左翼の若者から生まれ，政治，経済，国際問題を議論するためにアパートに集まっていた（ジョヴァンニはこのような「アパート」が 2 つあったことを覚えている）。“One Way”の若者を含むいくつかのグループがこれらの会議に参加した。会議の前に彼らは個人的に，あるいはグループの勉強会を通して真剣に準備し，常に議論レベルを高く保っていた。Cf. *Ibidem*, 113-114.

22 カトリック運動の学者であるアルナルド・ネスティ教授は，当時，ほぼ毎日の暴力的な記録の中に，レッジョ・エミリアの広場で踊って歌っている若者のグループがいたという事実に感銘を受けたことを覚えている。彼らは誰との対話も拒否したことがないと教授は言う。Cf. C. CORGHI, A. NESTI, G. STACCIA, *One Way, nascita di una compagnia,* (Atti della presentazione a Reggio Emilia del nuovo numero di “Religioni e Società”, 28 aprile 2009), Opera di Nàzaret, Reggio Emilia 2009, 3.

23 かつて自分たちを “One Way”と呼んでいた仲間は, “Compagnia”という呼称を選んだ。

24 Cf. G. RIVA, *Per la scuola,* One Way, Reggio Emilia 1999, 15-16.

“Nuova Scuola”は「カトリック」学校であるが，宗教的なスタンスから生まれたものではない。また子どもたちの逃げ場を作るためでもなかった。それは教育への情熱から生まれた。「ポリス」への愛という意味で「政治的」（passione politica）情熱である。神秘的に置かれた状況（歴史）では，その真の教育的提案から始まることによって，社会と未来を修正し豊かにすることができるからだ。ナザレのイエスに基づく人間性と文化の経験はこの親たちにとって最良のものであり，現実に出会あう内容と方法として新しい世代に提案すれば，現実そのものの究極的意義への希望を呼び起こせるものであった。

ジョヴァンニは「キリスト者とは人間そのものである」と信じていた。しかし，それは他宗教の人々，何にも属してない人々が人間ではないという意味ではない。彼にとってキリスト教は「宗教」というカテゴリーで片付けられるものではなかった。キリスト教は人間の基本的な要求に基づき，その要求は物事の性質に客観的に記され「キリスト教徒であろうとなかろうと，知性によって理解し認識できる」[25]からだ。キリスト教とは「完全な人間性の生きた表現として自分自身を提示した」無類の人間であるイエスに従うことである[26]。

“Nuova Scuola”は育成を通じて子どもや若者が，人生の意義と役目を発見できる場であった。文部省が定める教育法を遵守しながらも“Nuova Scuola”独自の理念と構造を尊び，誰にでも門戸が開かれた学校であった。つまり国家の教育制度に準じてはいたが，何よりも人間の優位性を選んだ。事実，国の教育制度は，「倫理国家」の扇動的な道具になる危険性がある。それは，知識を渡す最大の権威として市民の前に立ち，人格の形成が目的となる。言い換えると国家の歯車となる臣民を育てることになる。ジョヴァンニはこの意味で，学校を完璧なソビエト人を作る工場として位置付けたアントン・マカレンコと，社会効率のために人間を犠牲にしたジョン・デューイを例として挙げた。どちら

---

[25] Id., *Per un'opera sociale e politica. La politica,* Pane Pace Lavoro, [Reggio Emilia] 2013, 71.
[26] Id.『イエスを知るために』ドン・ボスコ社，2012 年，134-135 頁参照。

の場合も，功利主義的プロジェクトの中で人間は抹消され，学校は一種の組立ラインになる恐れがある。このような学校では，人間の姿と現実におけるその意義を正確に確認する試みではなくなり，数千年の文明を旅する人間のさまざまな表現の研究が中立的で概念重視主義の知識に限定される。そして主要な課題が充全的ヒューマニズムの育成ではなく，優秀な技術者，専門家，有能な人材を作るものになってしまう[27]。

民主主義は，教育における国家統制主義を受け入れることはできない。 ジョヴァンニによれば，国家は多様な構成要素において国民と社会に奉仕しなければならない。つまり「複数の教育的アイデンティティと学校を国の財産として，文化的，経済的に公平に評価する」[28]ことを考慮しなければならない。しかし相反すれば，国家は教育分野に自由を残さなくなる。「批判と更新が可能」な成人の誕生につながるからだ。(それは権力を握る人々が非常に恐れることであろう)[29]。国家が「標準化」を強要し，アイデンティティの多様性を排除すれば，専制政治は結局「暴力国家」に陥る危険性がある[30]。

ジョヴァンニが創立した学校は，このようなロジックとは対極的な精神を持っていた。構造においても，人間関係においても，一致した教育共同体であった。またカトリック学校とはいえ，すべての教職員が熱心なキリスト者というわけではない。彼らはそれぞれ異なるパーソナリティーや文化的な経験を持ち

---

27 Cf. *Ideario. Lezioni a una comunità educante A.S. 1987-1988,* a cura dell'Associazione The Great Teachers, Reggio Emilia 2014, 34-35. (以下：*Ideario*).

28 RIVA, *Per la scuola*, 33.

29 Cf. *Ibidem*, 32. 生涯を通してジョヴァンニは多元主義のテーマに興味を持っていた。文化的および教育的レベルで，多様性が一致のうちに存在できる社会になるよう，彼は常に闘っていた。誰もが自分勝手な行動を許可されるという意味ではないが，社会的および政治的コミュニティは，全体を形成しながらも統一されたものではないことを意味する。個人とその自由な集合体（特に教育的性質のものを含む）は，さまざまな部分の総合であり，「生きている一致した共同体，民と国家の富」であるとジョヴァンニは言う。RIVA，*Per un'opera sociale e politica. La politica,* 57。

30 Cf. *"Nuova Scuola" a Reggio Emilia. Un progetto educativo. 1. Identità e finalità,* Consorzio Nuova Scuola, Reggio Emilia 1991, 8.

ながらも，若者が成熟し自由になり，文化や現実を判断できる人間になれるよう，常に共にいることを意識していたと思う。決してキャリアや報酬のためではなかった。そして教師，職員，管理人，両親ら全員がこの非常に繊細な仕事に協力した。また“Nuova Scuola”では，生徒の誰もが贈り物として歓迎された[31]。

ジョヴァンニは“Nuova Scuola”と同じ理念で，1990 年にメキシコシティに ICTE（Instituto Científico Técnico y Educativo）大学を創立した。ICTE は自らを「最も小さな大学の中で 1 番偉大な大学」と呼んでいるが，事実，若者に対する愛情から協力し働いている良い例であると思う。そこは多種多様な社会的背景を持つ学生が集まってくる（貧富の差によって社会的・地理的にいまだに分裂が続くメキシコにおいて，これは稀有で驚くべき事実である）。クリスチャンであろうとなかろうと全ての教員は労力を惜しまず一心に働き，貧困に苦しむ人々を支援するために課外活動や文化活動にも協力する。彼らは学生，教授，管理スタッフと共に“Libros libres”（自由な本）と呼ばれる活動（日曜日，市場の露店で働く家の子どもたちに読み書きを教え，一緒に遊ぶ）を始めた。教育は彼らにとって自分自身の一部を共有することも意味する。共通の善のために，贈り物，時間，才能，経験を分かち合い，団結ではなく本物の交わりを建設する仲間である。

2.　人間の発展としての教育

2.1　方法：観察と理性

31 執筆者は 1989 年から 1990 年まで中学校で働く機会が与えられ，それらの現実を目撃した。裕福な子どもと貧困の子ども，カトリックと共産主義者，心に問題がある少年，深刻な問題がある家庭の子どもたちがいた。

20 世紀の最も偉大な教育学者の 1 人であるマリア・ザンブラーノは，「誰もが何よりも創造的な実現の約束である」と語っている[32]。ジョヴァニは常にこの約束に取り組んできた。彼にとって教育とは，言葉の語源が示唆するものである（ラテン語 : ex ducere，引き出す）。子どもは一方的に知識を投げ込まれる入れ物ではなく，また好き勝手に情報を書き込まれる板切れでもないことを，古代人は知っていた。しかし，この共通の人間性を引き出すには技が必要である。ギリシャ語の méthodos は「特定の場所に到達する方法」を意味する。方法を間違えると標的も外れてしまう。この技は，すべての人間に共通する 2 つの要素，観察と理性から構成されている。アレクシス・カレルが『人生の振る舞いに関する省察・*Réflexions sur la conduite de la vie*』に書いているように，物事が真実に導かれるのは具体的な現実の観察であり，現実の上に重なる理屈は必然的に主観的で気まぐれな結論につながる[33]。結果は非常に深刻である。「人は出会う対象を自分に合わせて変更する」からだ[34]。物事を知るにはそれらの観察を必要とし，目的の理解には理性を使わなければならない。“Adaequatio rei et intellectus”「現実と知性の対応」である。聖トマスによると，現実と知性を区別し，それらを同じレベルに置くことである[35]。

理性は観察に相反するものではなく，現実の深さを理解するためにむしろ観察を利用する（理性とは知性の同義語であり，「内部を読む intelligere」というラテン語から来る）。現実を認識することは人間の役目であり，人間だけが存在の理由を問いかけていることは事実である。確かに人間以外にその問いを持つものはいない[36]。

---

32 M. ZAMBRANO, *Per l'amore e per la libertà. Scritti sulla filosofia e sull'educazione*, Genova-Milano, Marietti 1820, 100.

33 Cf. A. CARREL, *Riflessioni sulla condotta di vita*, Edizioni Cantagalli, Siena 2004, 35.

34 *Ideario*, 8.

35 Cf. *Ibidem*, 8-9.

36 Cf. *L'unico necessario. Appunti della vacanza centrale 2-11 agosto 2009*, The Others e The Great Company, Reggio Emilia 2009, 39. (以下：*L'unico necessario*).「知性は人間だけが

理性は現実を知るために，コントの実証主義から 1 つのデウス・エクス・マキナが立てた科学的な方法だけではなく，目的に適した様々な方法を使用する。事実，「存在にかかわり，それなしでは生きることができない価値のある確実なものが存在している」。それらはいわゆる「道徳的確実性」，「事実的確実性」，または真実の証言に基づく確実性によって実証できる価値である。「たとえば，信仰はそれ自体が理性によるプロセスである」とジョヴァンニは書き，科学的方法で実証できないものは存在不可能であるという理論に異を唱えた[37]。

2.2　判断基準

現実を観察すると，人間は理性を使ってすべての存在を問いかける。しかしこの探求には判断基準が必要であり，偏見と先入観に基づくことではない。偏見はイタリア語で“pregiudizio”といい，語源はラテン語の「先に判断する」である。つまり，個人的，文化的，宗教的な理由などにより疑問を呈さず，事実を検証する前に，既知の知識に基づいて判断することを意味する。これに関して，ジョヴァンニはガリレオとパスツールを例として挙げている。ガリレオは，ヨシュアが太陽を止めるエピソードの信念に衝突した（ヨシュア記 10，12-1）（詩的な意味ではなく，文字通りに読まれたためである）[38]。パスツールは天

有する進化の特質であることを本気で疑うことができるか？」と T. ド・シャルダンが『現象としての人間』に書く。そして続く。「また知性の所有が人間にとって人間以前のすべての生物に対する根本的な優位性になるということを，何かしら見せかけの謙遜さでもって認めまいとすることができるだろうか？もちろん動物は物を知る。しかし確かに動物は自分が知っているということを知らない。[……]われわれは内省するから，動物と比べて，単に異なっているというだけではなく，また別種のものである」。T. ド・シャルダン著，美田稔訳『現象としての人間』みすず書房，1985，190-191 頁。

37 彼はさらに説明する。「客観性は確かに可能ですが，証明できない要因を排除する必要はありません」。*Ideario,* 23。リヴァ『イエスを知るために』186-191 頁参照。

38 このようなエピソードを *La Bibbia di Gerusalemme*（エルサレムの聖書）は次のようにコメントする。「この節の説明は天文学または星崇拝において意味を探すのは無駄である。これは詩的な表現であり，出エジプト記 15 章（モーセの賛歌）と士師記 5 章（デボラの賛歌，特に 20 節）に例えられる。神がイスラエルに特別な助けを与えたことで

才医師であったが，同僚の妬みと偏見に苦しんでいた。「何かを知りたければまだ何も知らない人のような態度が必要である。すでに知っていると思う人は新しいことを何も学べない」[39]とジョヴァンニは警告する。しかし，人間が偏見なく自分に目を向けるなら，「人間のうちに本質的に存在している価値，明らかな真実，要求を発見します」。 例えば「部分が全体よりも小さいこと，同一性の原則，因果関係の原則，無矛盾律」ということである[40]。同時に，正義，美，「仕合せ」への欲求を見出す。聖書はそれを「心」と呼び，ジョヴァンニは「基本的な体験」と呼ぶ。それが認識のメカニズムを動かすものである。「基準と現実の比較から判断が生まれます。したがって知識は出会いです」[41]。同じようにチェスタトンもこう言う。「神がわれわれに与えたのは画面の色ではなくパレットの色だということである。しかし神は同時にまた一つの主題，モデル，明確なビジョンをわれわれに与えてもいる」[42]と。この明確なビジョンは，思想概念による強制的な枠組みの意味ではない。むしろこれは，神秘が人間の自由に与える人生，人間関係，すべてに直面するための共通の人間性という「作業仮説」である。逆説的に，人間は心の法則に従うときこそ自由である。自我を主張しその法則を拒んでも，結局は不可能である。人間は生きるために空気にさえ依存しているからである。「自由とは知性が認めた善を求める意志である」[43]とジョヴァンニは若者に言い続けた。

あるが，解説者がヨシュアの偉大さを際立たせるために文字通り取り上げた」。*La Bibbia di Gerusalemme,* Edizioni Dehoniane Bologna, Bologna 1993, (n. 10,13), 425.

39 G.リヴァ『小さなキリスト教人間学』ドン・ボスコ社，2001 年，12-13 頁（一部改訳部分あり）。

40 Cf. *Ideario,* 11.

41 *Ibidem,* 13.

42 G.K.チェスタトン者，福田恆存，安西徹雄訳『正統とは何か』春秋社，1987 年，189-190 頁。

43 RIVA, *Per un'opera sociale e politica. La politica,* 43.

自由の名においてこの基本的な経験の存在が否定されれば，生みだされるのは相対主義である。つまり，真実はもはや客観的に存在するのではなく，今のところ，個人的な好みや興味が提案するものになってしまう。そしてパスカルが言うように「精神は，自然に信じるものであり，意志は，自然に愛するものである」[44]ため，心はこうした世間的メンタリティーに否定され，追及するべき目的が失われてしまい，人間は偽りの神々に身を預けることになる。結局，偽りの神々は約束を守らず，人間はいわゆる強力なマスメディア（「ホモロゲーション手段」と言うほうがよい）の膨大な情報が生み出す判断の奴隷になる。また物質的にも奴隷になる。

> ある一日マルクス主義者になったかと思えば，あくる日はニーチェ主義者，そしてその次の日はきっと超人になるのだろう。だが来る日も来る日も奴隷であることには変わりがない。［……］残ったものはただ一つ，相も変わらぬ同じその工場だけなのだ[45]。

3.　教育者

3.1　教育者：condicio sine qua non.

教育とは，「自然」が人間の中に入れたこのモデル，心，基本的な経験を「引き出す」プロセスであるが，自動的に成るものではない。心を込めて種を育て，刺激を与えなければ成長できない。あの素晴らしい映画「奇跡の人」（1962）を見た人は多いと思うが，あまりにも弱々しく寛大すぎた両親は，盲目，聾唖という三重苦を背負ったヘレン・ケラーを助ける方法が分からなかった。娘を甘やかし，状態を悪化させるばかりである。しかしアン・サリバン先生との出会

---

44 B. パスカル者，田辺保訳『パンセールイ・ラフュマ版による』新教出版社，81，175頁。

45 チェスタトン『正統とは何か』，194頁。

いにより，ヘレンは暗闇と沈黙から抜け出し，周囲の世界とコミュニケーションを取るようになる。

この話は先に述べた事実を表している。灰の下にくすぶっている火を呼び起こし，まだ胚である人間性を助け，保護し，発達させる「挑発者」が若者には必要である。この挑発者には大きな責任がある。挑発はイタリア語で provocazione と言い，“pro”（前）と“vocare”（呼ぶ）から派生した。「召命」（vocazione）と同じ語源である。したがって，教育者は新しい人間である子どもに，人間である尊い召命を呼び起こし，若者の「前」に人生を信頼する理由を「投げる」役目がある。最初の挑発者は，当然のことながら親であるが，次第に教師が参加する。

> 生まれたばかりの子どもは，最初の挑発者である両親を動く仮説として捉えます。誰かと接することによって何かを理解することができます。ですから子どもは親から徐々に様々なことを学びます。ゆりかごの赤ちゃんに微笑む母親は挑発そのものです。母乳も同じです。赤ん坊が言葉を覚えるために，お母さんが子どもに話しかけることは挑発です。そして後に，子どもの発達とともに，子どもの発達のために，物質以外の精神的な挑発もあるでしょう。[……]教育は，子どもから成熟した若者まで，さまざまな方法でなお且つ自分の独特な道において挑発者を持たなければならないという事実に基づいています[46]。

この仕事を放棄することは大人の最大の無責任といえる。それは自由な人間を創るという神の創造的な約束，この神秘的な方法を通過するからである。5 人の子どもの父親になったジョヴァンニは 1980 年に次のように書いた。「子ども

---

[46] G. RIVA, *L'educazione come sviluppo umano*, a cura dell'Associazione The Great Teachers, Reggio Emilia 2017, 18-19.

を教育する責任から逃げ出すことは，自分からの逃亡，社会に対する無責任な侮辱，愛に対する重大な犯罪である」[47]。逃亡はさまざまな方法で行われる。例えば，人間としての成長に心を配らず，衣食など物質のみを与える（残念なことにこれさえも行わない親がいる），あるいは自分の所有物やペットのように子どもを扱うことである。結果，親として教育者として守るべき大切な「無償の愛というルール」を破ってしまう[48]。

教育は「自己発展」であると主張する見解もあるが，それらも粉飾された逃亡にすぎず，現実を見ると偽りが際立つ。ルソーの『エミール』という主人公は自然に学んでいるように見えるが，事実，気づかないところで舞台裏の誰かにコントロールされているのである[49]。

教育とは子どものパーソナリティーを否定するものではない。同時に何かを押し付けるプロセスでもない。事実，挑発は何も強制しない。例えば規則の提案は，人間の調和と秩序の要求から生じ，教育者の権力欲求からではない。従って，このような秩序を受け入れることは自由になるためである。教育者は自由に提案できるが，選択するのは常に若者である。ユダもそうであったが，自分を愛してくれる人と自分自身を裏切ることも選択できる。イエスでさえ彼に何も強要しなかった。強要は若者の反抗，僕としての服従をもたらすだけであり，良心の成熟に寄与しないことは確かであろう。

宗教教育の場合はさらに明白である。人生に良いものであり理性的であるという確信を持てない伝統的宗教儀式や教義が少年に課せられた場合，彼らは反発するか，あるいは確認もせず（トラウマの痛みさえ感じず）そのうち離れることになるだろう。

---

47 Id., *Tirare su i bambini come Dio comanda,* http://thegreateachers.blogspot.com/2017/10/tirar-su-bambini-come-dio-comanda.html.

48 Cf. Id., *L'educazione come sviluppo umano*, 23.

49 Cf. *Ideario,* 25-26.

3.2　体系的な疑念と中立性

教育者は懐疑的であってはならない。懐疑論は，人生にポジティブであろう仮説を若者に確認もさせず，その結果，若者の建設的な情熱を無力にしてしまうからだ。

> このタイプの人間は決して真の教育者になることはできない。若者は確実性と安定したサポートを必要とする。そして疑い（探求後に生じる正しい疑問についてではなく，私は体系的な疑いについて話している）は罪である。人間がやるべきこと（それは若者自身が望むことだ）を妨げ，若者を現実に関わらせないからだ[50]。

一方で懐疑論は理性に反する。真実は存在しないと断言することによって「存在しない」という「真実」を述べているからだ。

すべての真実をあたかも同じであると提示する人，また人間の本質的な価値に関して中立的立場の相対主義者は教育者にはなれない。公立学校においてやむを得ない義務にみえる中立的相対主義は，無責任な姿勢であるとジョヴァンニは言う。このような大人は「成熟した賢明で経験豊富な人」というイメージを与えるが，実際，何かをしようとしまいと（例えば原子爆弾を使用するかしないか）同じであるというアイデアを若者に教え込む。

ジョヴァンニは公立学校に努めた経験から学校の深刻な教育的欠陥に気付いていた。それは中立性という実行不可能な位置に基づき，実証的知識のみを与える場所に凝縮されていたことである。何年もの後，“Nuova Scuola”学校の誕

---

50 RIVA, *L'educazione come sviluppo umano,* 14.

生について書かれた『*Per la scuola* 学校のために』（1999 年）という小冊子で，著者は次のように言う。

> 車やナイフを作ること，計算ができること，言語を操ること，化学実験すること，医学を学ぶこと，これらすべてにおいて，究極の意味，人生の基本的な意味，存在における個人的な関係の価値や責任，そして 他者との共生における有用性の認識がかならず含まれる。したがって，中立的なものは何もない[51]。

中立性の名によって，若者は虚無，あるいは絶対的個人主義に投げ込まれ，「権力者を恐れ，言いなりになり，しかもこびへつらう奴隷に形成されてしまう」[52]。

3.3 言葉の再発見

真の教育者とは，人間を偽物の理想と価値観に同化させようとする危険で世間に浸透している考え方に反して，生徒のために，彼らと共に闘う人である。この精神は，物質的な成功が神の祝福のしるしとして，あるいは人に価値があるかどうかを判断する唯一の尺度としての概念を若者に信じさせるものである。2019 年 11 月 25 日の東京ドームでのミサの説教で，教皇フランシスコはこれを強調した。

> 他者を支援すべき家庭，学校，コミュニティが，自己利益と効率を求める

---

[51] Id., *Per la scuola*, 17.
[52] *Ibidem*, 20.

過度の競争によってますます悪化しています。多くの人々は混乱し，不安を感じ，平和とバランスを奪う多くの要求と懸念に圧迫されています[53]。

共通のメンタリティーとの闘いは，人間に「平和」と「バランス」を取り戻し，つまり物質的精神的に所有しているものに関係なく，個人の価値の認識を回復することである。

そして，この闘いでは言葉の本来の意味を再発見する取り組みが非常に重要になる。今日，誰もが（戦争をする人や，個人，グループ，国家利益のために数えきれない人々を飢えさせる人も含めて）民主主義，平和，正義，愛，自由という言葉を使用している。先に述べた言葉の正しい意味は，人間的要素を無視し共存に混乱を生み，神の代わりを目論む特定の権力によって広まった解釈（ソーシャルメディアは，真偽を問う時間と空間を与えないことによってそれを助長している）に打ち勝つことができる。

教育者は，言葉そのものを生み出した源に遡り，本質に気づくことによって常に現実に直面し，それを表現する自分自身が「より基本的で，より本質的で，より総合的」[54]にならなければいけない。このようにして教師も生徒も，提供されるものを無分別に吸収してはならないことを学び，その時の潮流に影響されず，出来事を自由に判断できるようになれるだろう。「ある言葉［……］の意味を考える努力は，現実的に日常生活をも理解させることになるだろう。言葉は命を説明する。ある意味で命を創造する，と言える」[55]。

---

[53] Papa Francesco, *Omelia*, 25 novembre 2019, Tokyo Dome, http://www.vatican.va/content/francesco/it/homilies/2019/documents/papa-francesco_20191125_messa-tokyo-omelia.html.

[54] Cf. RIVA, *L'educazione come sviluppo umano*, 10.

[55] Id.『イエスを知るために』，18 頁（一部改訳部分あり）。

ナザレのイエスへの信仰の真理を若者に紹介する場合，この課題はさらに重要になる。事実，われわれキリスト者の間違いの 1 つは，「神」「キリスト」などの言葉を，異文化，他宗教に属する人々に対して当たり前に使い，それが相手にとって何を意味する，または意味しないかを問わないことである 。

> もちろん「神」や「キリスト」という言葉は神秘に包まれており，私たちはそれを完全に理解できない。同時に，それを人生の具体的な出来事に関連する言葉として扱わなければ，その言葉の真意を呼び覚ますことも，言葉が訴える責任を考えることができない。そしてその訴えに応えるか拒むかという選択さえもできない[56]。

4. キリスト者の教育者

教師は「教育しなければならない」という以前に，良くも悪くも教室に入る前からすでに教育が始まっていると言える。 今日の若者を見ると，彼らがどのようなタイプの教師に出会ったかがすぐに分かると思う。教育は人間性（または「非人間性」）を伝えることである。その結果，教師の本質がキャリア，お金，自己利益のための競争であるなら，必然的にこれらを生徒に伝えることになる。しかし若者は大人を明確に観察しており，このような教師は真に権威のある人にはなれない。せいぜいインストラクターかハウスキーパーのようにしか思われないだろう。このような教員は育成も行うことはできないだろう。それは「無責任，無関心，面倒ごとを回避する姿勢，つまり人生への関わりの欠如である」[57]からだ。

---

[56] 同上。

[57] G. RIVA, *La comunità educante*, Opera di Nàzaret, Reggio Emilia 1994, 6, pro manuscripto.

「まったく新しい存在」である若者に直面するとき［……］教育者は何よりもまず教員である前に人間である。教育者は人格を隠して若者の前に立つことはできない。したがって教員としての最初の役目は，自身の人間としての経験の意義を取り戻すことである。よって，本質的に人間性に直面し，人生において最も深く願っていること（専門分野も含めて）をその人間性と関わらせなければならない[58]。

キリストを信じる教育者とは，ナザレのイエスが達した満ちた人間性を自分と生徒のために望む人である。自分も同様に，知性が認めた善を求めることを若者に促す人である。このような大人との出会いは，人生最大の贈り物であろう。「神に似たものになる」（1 ヨハネ 3，2）を望んでもよいことを生徒に明らかにするからである。 ただし，それはニーチェの超人のように神に反することではなく，神の恵みを通してである[59]。手が届かない神ではなく，イエス・キリストの内に人間になり，過去においても未来においても歴史上最大の出来事であり，歴史そのもの，人類，そして地球上の一人ひとりに意味を与える神。無意識であろうと皆が待っている神である。教師は自己実現への歩みを若者に紹介し，共にいることによって若者は「大きく・magis」[60]なる。個人的なスキルではなく（あってもよいが），キリストについて行く謙遜で根気強い姿勢を通してである。数学を教える時に，式と式の間にイエスの名前を言うということではない[61]。教師の情熱と主題を教える方法，時間とスキル，生徒たちとの関係を

---

58 Id., *L'educazione come sviluppo umano*, 14-15.

59 Cf.C. MOELLER, *L'uomo moderno di fronte alla salvezza*, Borla Editore, Torino 1967, 93. シャルー・ムッレーはジョヴァンニが大変愛した神学者である。

60 イタリア語の “maestro” (先生)はラテン語の “magis”から来る。

61 1999 年に京都で開催された講話を思い出す。テーマは「クリスマスの意味」であった。イタリアのクリスマスケーキ「パネットーネ」の意味に関する学生からのやや表面的な質問から，ジョヴァンニは教会が何であるかを説明することができた。「家族全員が集まったときに食べられる大きなパンです。コンパニア（共同体）という言葉も，すべての人への配分を思い起こさせる語源的な意味を持っています。つまり，『パンを共有す

構築する方法によって，その教師は「何か」のしるしとして彼らの目に映るだろう。

> まず基本的なことは，若者をどうするかではなく，私がどうあるべきかという問題です。[……]問題は私の信仰です。ですから，人生の神秘，キリストという神秘との関係，イエス・キリストへの親しみ，彼への願い，人生のすべての課題（最も親密なものから政治的で公的なものまで）を，イエス・キリストとの信仰の内に生きないなら，私たちは何を伝えることができるでしょうか。もし，すべての問題の答えである彼が今日ここにいるという意識を絶えず生きていないなら，これを生きていないなら，私たちは何を伝えますか[62]。

したがって，キリスト者である教育者の第 1 の使命は，自分の人間性がイエス・キリストへの信仰に基づいている意識を回復することである。なぜなら，その意識が若者との真の関係を構築するからである。彼らが望むなら，自由に教師について行くことを選ぶだろう。教師自身が本気で「他者」について行っているからである。

この理想的な一貫性（人間は自分自身を完成させることができないため，道徳的一貫性と言えない）はキリスト者に求められるものであるが，彼らにだけではない。どのような信仰に属していようとすべての教育者は，自分の人生において信じることへの正当性を若者に証言する義務を負っている。ジョヴァンニは，どのような人の経験においてもその真価を発見する才能があった。この

る』という意味です」。ジョヴァンニ・リヴァ「クリスマスの意味について」，京都外語大学，1999 年 12 月 9 日。（学生サークルでの講話）。

62 Cf. *Perché essere educatore*, [seminario con Giovanni Riva], Roma, 2.6.2008, Educatori Compagnia, Reggio Emilia 2008, 5.

意味で彼は第2バチカン公会議の人であった。彼は「みことばの種子」とすべての人を照らす「真理の光線」に敬意を払った[63]。また，善意の人が共有する責任という意味でもあった。

> 口と心が言うことは，仕事で毎日行われる出来事において証明しないといけません。［……］判断基準，つまり人生の意味がキリストであるという事実について話したとき，特に私自身と関係していることとして述べました。しかし私は確信しています。あなたを動かす信念が何であれ，その理想の一貫性が求められます。あなたがマルクス主義者，イスラム教徒，キリスト教徒であれ何であれ，価値への呼びかけは，キリスト教に限定されるものではありません。これは人間の問題です[64]。

4.1　教育すること，共に歩むこと

誰でも好きではない教科があったと思う。しかし嫌いな教科でさえ，ある教師のおかげで容認することを学んだ覚えがあるだろう。この単純な経験は実質的な事実を示している。指導は教育であり，教育は人間関係ということである。つまり，教育することは共に歩むことを意味する。教師と生徒の関係は，テレビ，コンピューター，インターネットなどの教育ツールによって確かに助けられるが，教育は人々との関係が必要であり，決してそれらに取って代わることはない。他者と共に歩むものだけが，他者の成長を助けることができる。人間性は個人のうちに収めるものではない。われわれが「私の」人間性について話すとき，それはすぐに「私たちの」人間性になるのだ。リンボーが言うように

63「教会の宣教活動に関する教令 *Ad Gentes*」11，「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言 *Nostra Aetate* 」2参照。

64 *Padri e figli: l'alibi dell'incomunicabilità. Educare?E' facile, quasi come vivere,* "Avvenire", 1.11.1979, 5.

「私とは 1 人の他者なのです」[65]。個人は人類の共通の人間性において孤立できないのである。世の中に生まれてくるには父親と母親が必要である。つまり個人はすでにコンパニア（交わり）として生まれていると言える。共同体的な要素が源であり，人生はコンパニアそのものである。そこで教育的な仕事は後から押し付けられるものではなく, 自己の実存的な交わりの経験として発展する。「この源である要素の意識が欠けると, 人間を操作するプロジェクトに陥ります。それは生産主義，国家効率，神話にすぎない『社会的進歩』です」[66]。一方，共通の源の発見は, 個人を普遍的な家の無意識なレンガの 1 つにすることはない。むしろ，自分も他者も唯一でかけがえのないものとして，創造物と今も発展し続ける（in fieri）自己完成のために，他者との協力を可能にする。若い人が「自分自身が唯一な存在であることを発見すると，それは普遍性のしるしである」ことに気付くと，勉学を含むあらゆる行動が計り知れない意味と価値を得て，責任はもはや負担ではなく，自由そのものの仕事になる[67]。イエスは，新しい宗教や新しい道徳をもたらすために来たのではない。彼は「すべてが含まれ，評価され，満たされる人間的な経験を通して」[68]，つまり神との交わりを通して，また人と人との交わりを通して神との関係，創造物，そして贈り物として創られた人間との関係を変えに来た。

では，われわれはこのすべてを約束してくださったあの男（未だにわれわれの必然的な弱さにもかかわらず), 確かな目的を持ちわれわれの手をとって神のレベルに導いてくれたあの無類の男に今日どこで会えるのか。それをイエス自身が見せてくれた。それは彼の後ろを歩み，彼の現存を証明する人々との交わりの中である。ジョヴァンニは，2009 年の国際ホリデーに集まった若者たちに

---

65 A. RIMBAUD, *Lettres d'Arthur Rimbaud dites "du Voyant", Lettre a Paul Demeny*, Charleville, 15 Mai 1871, http://www.mag4.net/Rimbaud/Documents1.html.

66 RIVA, *La comunità educante*, 9.

67 Cf. *Ibidem*, 10.

68 *L'unico necessario*, 91.

「私はイエスを理解するため，そして新しい人間になるために，つまりできる限り本物になるために，コンパニアがあるところ，そこに行きます」[69]と説明した。

4.1.1 文化的事実としてのコンパニア

したがってコンパニアとは，神が絶え間なく自分に出会わせる方法，その出会いが運ぶ価値観の確認に招く場所である。故に存続的な教育の場となる。言い換えると，パーソナライゼーション（典礼の言葉「記念」に相当する）を行うように個人を招き続ける。「『私が生きるのはキリストである』と言えるまで，あなたのキリスト者としての成熟と建設する能力が育つ場所である」[70]。このパーソナライゼーションの仕事を支えるために，ジョヴァンニは若者への研修会を重ねた。そこでは，ついて行く犠牲の中で「説得力があり，美しい」と思われるある特別な生活を確認し，同時に最も身近に起こる些細な出来事から国際的な問題まで，すべてを計る判断基準を学ぶことができる[71]。「ある環境，社会に生きるキリスト者の交わりは，経験における一致に従って，現実を判断する新しい方法で生活している」[72]と『私は教育者ですか』に書いている。

事実，キリストの出来事の個人的な意識は，「共に招集された」というものであり，この場合にのみ真実で効果がある。神のみ国は，形式的またはプロパガンダではなく，アガペに基づくという宗教的な一致の中で構築される。

---

69 *Ibidem.* 国際ホリデーは，毎年 8 月に Passo del Tonale（イタリア）で開催され，さまざまな国の若者が参加するワークショップや会議などである。詳しくはヴォルペ「オペラ・ディ・ナザレ - 十字架につけられたアガペ」，42 頁参照。

70 G. RIVA, *Un'azione educativa cristiana*, Opera di Nàzaret,［Reggio Emilia］1995, 8, pro manuscripto.

71 Cf. *Perché essere educatore*, 9. ジョヴァンニが始めたコンパニアは 1999 年にオペラ・ディ・ナザレの名によって教皇認可が与えられた。キリスト教生活の形成と養成のためのこれらの勉強会，黙想会，様々なイベントは年齢の枠を超え，すべてのグループに継続的に行われている。勉強とは死ぬまで続く願いであるからだ。リヴァ『小さなキリスト教人間学』12 頁参照。

72 *Sono un educatore?*, Educatori Compagnia, Reggio Emilia, 2.

聖霊によって与えられた本来のアガペが養われると応えを求める。そしてその応えは友情を生み出す。友情が本物であれば驚くほど具体的になり，人々の要求に応じ，ますますコンパニアを創造する[73]。

キリスト者のコンパニアは文化的な出来事であり，人々に運ぶことができる。それは人々を回心に導く。回心の目的は，神の内に全うされる自己実現である。今，すでに始まったその歩みはイエス・キリストのように，人生を完全な分かち合いに変える。しかも死に至るまで。

結論

ジョヴァンニは「新しい」学校を作った教育者であった。それらの学校規約を定め，献身のうちに支えていた。彼の召命はまさに教育者であったと言える。事実，彼は「生涯を通して教育者が必要である。すべての人生において，良心は神秘によって刺激される必要があるからだ」[74]という類まれな意識を持っていた。彼にとって教育の目的とは，20 歳の時でも 70 歳になっても，宇宙と歴史の中心である唯一無二のキリストの出来事を発見することであった[75]。キリストがすべての中心であるなら（これは個人が経験すべきことである），彼に出会って彼を知り，彼に執着することによって，あのガリラヤ湖の漁師たちに起こったように，新しい人格を生み出す超越的な革命が起こりうる。「古代のヒューマニズムが想像した人間の誇り高き道徳における誠実さの欠落」[76]を改善する問題ではない。むしろ贈り物として，イエスによって成し遂げられた神の愛というプロジェクトに参加することになった。この贈り物を受け取るには個人

---

73 リヴァ『小さなキリスト教人間学』，134 頁（一部改訳部分あり）。

74 *Perché essere educatore,* 3.

75 「人間のあがない主 *Redemptor hominis* 」，1 参照。

76 C.CHARLIER, *La lettura cristiana della bibbia,* Edizioni Paoline, Roma 1979, 192.この『聖書のキリスト教的読み方』をジョヴァンニはいつも学生に読むことを奨めた。

の自由な選択が必要であるが，ジョヴァンニ・リヴァのような情熱的で無償の仕事をする教育者が不可欠である。

彼自身，16 歳の時に出会った挑発者であり教育者であった信仰ある人々のおかげで，常に彼の唯一の愛となったキリストについて行くことを選んだ。 彼の生涯はキリストに捧げられた。つまり人々に捧げられたものになった。多くの仲間はジョヴァンニからキリストを「感染」し，彼から学んだことを今でも様々な国や状況において生かしている。